

# ゾフィア・ナウコフスカ著・加藤有子訳 『メダリオン』 東欧の想像力<sup>12</sup>

松籟社、二〇一六年

諫早 勇一



松籟社刊行の『東欧の想像力』はフラバル、キシュをはじめ、注目すべき作家たちの作品をいくつも取り上げた意欲的なシリーズだが、新たに本学の加藤有子准教授の訳書『メダリオン』が加わった。

ソ連による「解放」後すぐに組織された、ポーランドにおけるナチス犯罪調査委員会に加わった女性作家ゾフィア・ナウコフスカ（一八八四―一九五四）による短編集『メダリオン』は、訳者によれば「世界的にも最初期のホロコースト文学」であり、ポーランドでは「知らぬ人はいないほど有名な」古典だという。そして訳者解説では、ナチスによる未曾有の犯罪を告発した記録文学・証言文学としての側面だけでなく、「証言の聞き手」語り手は一人称を極力排し、証言者の様子や証言の情景を三人称で簡潔に描写する」というその独特な「語りの手法」も丁寧に紹介されている。

『メダリオン』には八つの短編が収められているが、最後の「アウシュヴィッツの大人たちと子供たち」は「先行する七編のまとめ」で、作者の考察が中心になっているから、これ以外の短編を眺めてみよう。巻頭の「シュパンナー教授」は、人間の死体の脂肪から石鹼製作を試みたとされるドイツ人学者の作業場を訪れた語り手の淡々とした語り口が印象的だが、それでもグロテスクな描写の連続は、いきなり読者を想像を絶した世界に引きずり込む。つづく「底」は収容所生活を生き延びた女性の回想で、移送車両を開けさせた「ド

イツ人ださえ私たちをみて恐怖に陥ったのです。彼女たちが耐え切れなかったとしてもなんの不思議もありません」という結びは、言葉を尽して惨状を描く以上の迫力をもっている。「墓場の女」は、ワルシャワ・ゲットーの悲惨な蜂起を壁のこちら側から綴り、短編集の題名にもなっている「メダリオン（墓石に嵌め込まれた肖像レリーフ）」という語が登場する作品だが、「現実には耐えることができる。すべてを知らされてはいないからだ。現実には私たちのところに届くとき、出来事のかげら、報告の断片になっている」という一節は、私たちの想像力が到達できる現実の矮小さを教えてくれる。

四編目の「線路脇で」は、移送列車から飛び降りたものの撃たれて歩けなくなった女性の物語で、周りをとりまく人々からわずばかりの親切を受けた後、彼女は望みどおりに撃たれて死ぬ。「何もない平原の向こうに小さな家々がいくつか立ち並び、反対側には小さく痩せた松の木が数本、枝で空を撫でていた」というさりげない風景描写が印象的だ。つづく「ドウヴォイラ・ジェロナ」は、ユダヤ人掃討作戦を必死に逃げ延びたユダヤ人女性の話だが、彼女の「生きたかったのです」「すべてを話すためです。彼らが何をしたのか世界に伝えますよう」という願いは作品の中で実現されている。これに対して「草地」は「ユダヤ人に憎しみなどありません。蟻やネズミに憎しみなどないのと同じです」と語る、ユダヤ人でない側からの証言になっている。間近に迫る死を感じながら、弱った身体でユダヤの賛歌を歌うギリシアの女性たちの精神的な力強さは感動的だ。七編目は「人間は強い」と題されているが、これは人間の精神的・肉体的な強さを讃える言葉ではなく、暴力を加える側の、人間はいくら虐待しても死なないという残酷なアイロニーを込めた言葉だ。忘却の際にあつた絶滅収容所へウムノを舞台にしたこの短編には、小さな施設で大量のユダヤ人が虐殺されていく驚くべき事実が淡々と語られている。

「人間が人間にこの運命を用意した」という、最後の短編にもエピソードにも記された言葉は、この短編集を読んだ後も心から消えない。ポーランドの美術・文学から戦争表象まで研究領域の幅広い加藤さんのこの訳書は、残酷な殺戮が消えずにいる現代世界を考えなおすために必須の好著だろう。